

Spiritualism News Letter

2000
第10号
7月1日発行

スピリチュアリズム・ニューズレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場
発行人/小池里予
〒441-3147愛知県豊橋市大岩町字火打坂18
TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257
ホームページアドレス <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

今号の内容

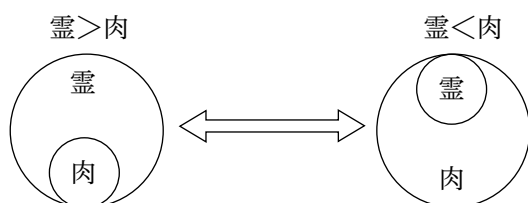
- ・霊的人生の出発は、欲望・本能の抑制から
— スピリチュアリズムは厳格な欲望抑制主義です。……1
- ・清らかさを求めての自己克己の歩み — “性欲”との闘い……9
- ・どちらでもよいことに、いつまでも関心を向けてはなりません。
— 宇宙人・UFO・超古代大陸文明について……15

霊的人生の出発は、欲望・本能の抑制から スピリチュアリズムは厳格な欲望抑制主義です。

「霊主肉従」と「肉主霊従」

地上において魂（霊性）を高めるために真っ先にしなければならないことは、私達の心を「霊優位にする」ということです。私達の心が霊的な方向性を取っている時、心は霊優位の状態に置かれます。逆に心が本能や物欲に支配されている時、あるいはお金儲けやセックスのことばかりに向けられている時は、本能優位・肉優位の状態になります。この前者の状態を「霊主肉従」と言い、後者を「肉主霊従」と言います。

霊的真理をじっくり読んだり深い祈りをした後、心がすがすがしく洗い清められたように感じられる時は、霊主肉従の状態にあります。反対に霊的真理もどこかに消え失せ、剥き出しの感情と本能に翻弄されている時は、心は肉主霊従になっています。私達地上に住む人間は、こうした二つの状態の間を絶えず揺れ動いています。すなわち、霊が支配的な状態と、肉（本能）が支配的な状態の間を行ったり来たりして日々の生活を送っているということです。



「霊主肉従」の闘いは、地上ならでのもの

肉体のない霊界人は、私達地上人と違って「肉主霊従」の状態になることはありません。霊界人は肉欲から完全に解放され、地上人のような霊と肉といった内面の葛藤を持つことはありません。地上人から見た時、霊界人はまさに清らかさだけの存在となっています。一方、肉体をまとっている地上人においては、全く異なる方向性を持った霊と肉が一つの心の内に存在します。霊は利他的方向を指向し、肉体に属する本能は利己的方向に向かおうとします。それによって心の中で激しい闘いが生じることになります。

私達が霊的成長をなすためには、「霊主肉従」の状態をつくり上げることが最低条件となります。霊が肉体の力に閉じ込められている限り、霊的な成長は不可能なのです。地上で霊的成長を望むならば、霊主肉従の闘いを避けることはできません。

スピリチュアリズムの第一の実践は、「霊主肉従」のための内面の闘い

もし私達がそうした内面の闘いを避けて、霊的真理普及（伝道）という外面的な行動に邁進しても、単なる活動家になってしまいます。霊的成長はできません。自分に甘く、他人に厳しいだけの人間にな

ってしまいます。私達はまず自分自身の内面の闘いをへて、“真の信仰者”となるように努めなければなりません。それから外へ出て人々のために働くということです。先に自分自身の内面を厳しく律し、自らの心をスピリチュアリストとしてふさわしいものにしなければなりません。スピリチュアリズムの霊的实践の第一歩は、「霊主肉従」の内面的闘いから始まるのです。

霊が主人で物は僕です。つねに霊に係わることを優先させなさい。

〈シルバーバーチ12・231〉

残念ながら大部分の地上の人間においては、その霊があまりに奥に押し込められ、芽を出す機会がなく、潜在的な状態のままに放置されております。これではよほどの努力をしない限り覚醒は得られません。

〈シルバーバーチ1・99〉

霊的知識を有する者はそれを正しく運用して、物的要素に偏らないようにならなければなりません。霊的要素の方に比重を置かなければいけないということです。

〈シルバーバーチ1・74〉

人間の中に存在する獣性

シルバーバーチは、霊と肉の関係について次のように言っています。

人間には神性が宿っていると同時に、動物進化の名残としての獣性もあります。人間としての向上進化というのは、その獣性を抑制し神性をより多く発揮できるようになることです。

〈シルバーバーチ11・185〉

ここにおける獣性とは、動物との共通要素である“肉欲的本能”を指しています。動物は常に本能が自然法則によってコントロールされているため、本能的行動が一定の限度を越えることはありません。生きるのに必要なだけ食べ、それ以上は食べません。子孫を残すためにだけにセックスし、それ以外のセックスはしません。それに対し人間には自由意志が与えられているため、無制限に肉体的本能を追求することができるようになってきました。必要以上に食べ、限度を越えてセックスをすることができるのです。

本能は自己の生存を可能にするために神から与えられたものであり、自分自身のためにのみ働くようになっています。本能の本質はエゴ性・利己性ですが、自己の存続を図るといった目的のもとにあっては、それは正当なものとなります。一定のコントロールのもとに置かれる限り、本能はその役割を果たして人間に貢献することになります。

しかし、そうした本能的欲望を限度を越えて求めるようになると、本来の在り方から逸脱することになります。その人間全体が醜いエゴ的存在になってしまいます。霊性は隅に追いやられ、一切の活動ができなくなり、単なる本能だけの人間になってしまうのです。結局、動物にも劣るような醜い存在に堕ちてしまうのです。

シルバーバーチの言う獣性には、食欲・性欲といった本能ばかりでなく、そこから派生する名誉欲・支配欲といった利己的の欲望も含まれています。



スピリチュアリズムは、厳格な欲望抑制主義

先に述べた霊主肉従のための努力とは、こうした本能的欲望・利己的物質欲を抑制し、コントロールすることに他なりません。欲望抑制のための努力、ストイックな努力を意味します。スピリチュアリズムにおける“霊的人生”とは、この自己の内面における闘いから始まります。その意味で、スピリチュアリズムは、厳格な欲望抑制主義と言えるのです。地上の人間には、地上で魂を成長させるために、地上ならではの努力が必要とされます。肉体を持たない霊界人や天使とは違った努力が要求されます。また霊と肉の二重構造を持たない動物とも違った努力が要求されます。それが「霊主肉従」のための自己克己の闘いなのです。

私達の魂は、肉体的本能をコントロールする努力を通じて、初めて成長するようになっていきます。この自己コントロールの努力は、すべて各自の自由意志のもとに実行されなければなりません。自己克己の闘いをなして自らの霊性を高めるのも、その闘いを避けて霊的成長のチャンスを失うのも、すべて本人に任されています。成長も停滞もみな、自分自身が決めるといことなのです。

霊主肉従の闘いには、確かに大変な苦勞がともないます。しかし、その苦しい霊主肉従の闘いを自らに強いることよってのみ、私達は、地上人生を有効に活かすことができるように運命づけられているのです。

欲望抑制主義は、人間らしさを取り戻す方法

現代の大半の人々は、“欲望の抑制”を時代遅れの考えであるかのように錯覚しています。人間から自由を奪う^{いと}厭うべき考えのように思っています。ストレートに欲望を求めることは人間に与えられた特権であり、人間らしく生きることであるかのように思っています。しかしその結果、多くの地上人が獣にも劣るような醜い人間に堕ちています。そして死後、初めて自分の地上人生のあまりの愚かさに気づくようになるのです。かけがえのない地上人生を無駄に過ごしてきたことを実感し、激しい後悔の念に駆られるようになるのです。

現代の地上世界は“物質主義”に覆い尽くされ、霊的成長にとって最も困難な状況が展開しています。その最大の原因は、地上人が「霊的事実」に無知であるところにあります。事実、死後にも永遠の生活があり、地上はそのための準備の場であると知ること、霊的人生を歩む上での最低の知識を持つということです。ところが、その最も基本となる知識を受け入れている人は、あまりにも少ないのです。

お金・セックス・名誉・権力

——この世の四つの欲望

私達につきまとう肉体的・本能的欲望とは、具体的に言えば、「金銭欲・物欲」「性欲」「名誉欲」「権勢欲」の四つに要約されます。現代人の大半の人生は、まさにこれらの欲望を追求するものとなっています。肉主霊従の結果、こうした四つの欲望を満足させることが地上人生の目的となっています。

金銭欲・物欲

大部分の現代人にとって、お金は物質的な欲望を満たすための最も大切な手段であり、頼りがいのある存在です。お金があれば、おいしいものを食べ、すばらしい邸宅に住み、高級車に乗り、流行の衣服を身に付けることができます。思う存分、旅行や娯楽を楽しむことができます。多くの人達は、「お金こそが自分に幸せをもたらし、幸福を決定するものである」と考えています。現代社会においては、すべての価値はお金によって決められており、実質的な“価値観の基準”となっています。

また現代の極端な物質中心主義の社会にあって、人々は絶えず本能的物欲を刺激され続けています。マスメディアによって流される情報によって煽られ、人々はいつの間にか、より多くの物を買ひ、より多くの物を消費することが当然のように思い込んでいます。高価な物を買ひ求めることが、すばらしいことであるかのように思わされてしまっています。テレビや雑誌で宣伝される新商品を手に入れなければ、社会から取り残され、幸せを失うかのような錯覚に陥っています。そして政府までもが、国民に質素な生活を勧めるのではなく、もっと消費を増やして贅

沢をするような政策を推し進めています。国民がさらに物を買ひ贅沢をしない限り、現代の経済は成長していかないようになっていきます。

個人から政府に至るまで、明らかに社会全体が、国全体が狂っているとしか言いようがありません。最少限度の物で満足し、それを丁寧に使い古すまで用いるという当たり前のことが、現在では美德ではなく厭うべきライフスタイルになってしまっています。物欲を助長するのが当然で、正しいことようになってしまっているのです。

金と物欲だけを追及する地球上の国々

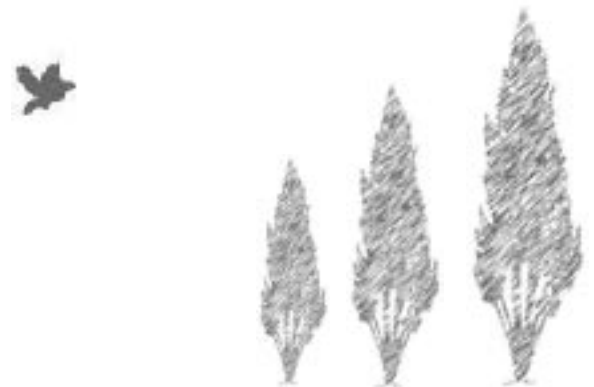
このように異常な“物質主義”に躍らされているのは、単に日本だけのことではありません。それは、経済的に豊かになったいずれの国々にも見られる共通の傾向なのです。物質中心主義によって引き起こされた大量生産・大量消費・贅沢指向の風潮は、今や全地球を覆い尽くそうとしています。工業化を推し進め、国の経済発展に成功した結果、どの国も例外なく、本能的欲望をさらに追い求める社会をつくり上げてしまっています。金銭的に恵まれるようになった国民は、高価な流行の衣服や装飾品を身に付け、美食に殺到し、豪華で広々とした家を建て、高級な車を持つようとしています。かつて一部の金持と特権階級だけに許されていた狂った肉欲的な放縦生活を、多くの一般大衆・国民が堰を切ったように一斉に求め始めているのです。そして欲望剥き出しの世界をつくり出しています。いずれの政府も、国民に幸せをもたらすという大義名分のもとに物質的な繁栄を第一の国政に掲げ、経済的な発展を優先してきました。それによって、確かに国民に対して物質的肉欲の満足を与えることに成功しましたが、同時に、人間にとって最も大切な“霊的幸福”を奪い取る結果を生み出してしまいました。お金さえあれば何でも手に入る、何でも可能になる、という物質主義的世界にあって、最低限の物質に満足し質素な生活を送るというライフスタイルは、もはや時代遅れのものとなってしまいました。

こうした物質中心主義を国レベルで最も成功させ、それを世界中に普及させてきたのが20世紀の

アメリカだったのです。現代の世界各国は、物質主義の夢を真っ先に実現させたアメリカを目指し、これに倣おうとしています。世界中の人々はアメリカの物質的繁栄に憧れ、アメリカ人と同様の物質的恩恵にあずかりたいと願ってきました。国民も政府も、アメリカのような物質文明社会を目指すことにおいて、意見は一致しているのです。そして、こうした物質主義文明への憧れが、現在の経済的混乱の中に自らを巻き込むことになったのです。

ここ10年ぐらい、そうしたアメリカを中心とする気違いじみた物質主義・金権主義的傾向が最も極端な形で展開し、末期的な経済状況を迎えるようになっていきます。現在の世界経済は、アメリカ人の途轍もない贅沢によって支えられています。外国から借金をしてまで消費に走るアメリカ人の贅沢さによって、アメリカの好景気をもたらされています。日本は貿易で儲けたお金をアメリカに貸し、アメリカはその借りたお金で日本や海外から物を買ひ漁り、さらに贅沢な生活を続けています。こうした状況の中で、日本とアメリカの関係が成り立っているのです。日米両国は経済的に深く結び付いているとは綺麗ごと麗事で、実際には常識では考えられないような異常な関係にあるのです。アメリカ人が贅沢をしてくれないければ、日本の経済は不景気になるといった狂った構造の中に組み込まれ、日本自身が身動きできなくなっているのです。

これらの根本的な原因は、アメリカと日本がともに、物質的な繁栄を最も価値あるものとする価値観自体にあるのです。“物”を最重要なものと考えている限り、現在直面している経済的問題を根本的に解決することはできません。



セックスの快樂に狂奔する現代人

さてお金が手に入るようになり、物質的な生活が保証されるようになると、人々が次に向かうようになるのがセックスの快樂です。食べることに精一杯の苦境から脱すると、あるいは宗教的な規制がなくなると、多くの人々は例外なく、セックスの快樂を求めようになります。歴史上、富と権力を手にしながらも、セックスの快樂に溺れることがなかった人、潔癖な人生を送った人は稀と言ってもよいでしょう。そのような人は、まさに聖人というべき高潔な人格を持った人と言えます。経済的に豊かになった現在の日本においては、国の隅々に至るまで、また若者から年寄りに至るまで、退廢的なセックスが浸透しています。これまで一部の特権階級・金持にのみ見られたセックスの乱れは、現在の日本においては、全国民的な傾向になっています。

厚生省による都立高校生を対象にした最近の調査では、高校三年生の40パーセント近くにセックスの体験があることが報告されています。また平成10年度における10代の人工妊娠中絶数は、女性人口千人に対して9、1人で、過去最高であることが分かりました。このようにセックスの乱れは、異常な広がりを見せています。

自由奔放なセックスの快樂追求ほど、人間を獣以下に貶めるものはありません。靈的に見た時、現代世界は、まさに獣にも劣る人間を次々と増産しています。性欲に対する歯止めがなくなり、本能の赴くままセックスに走ることによって人間は「靈性」を失い、ますます欲望・本能の虜になるようになります。性欲コントロールの壁をすべて取り去ってしまうところには、本能の暴走しか存在しないのです。そしてそういう人間によって、死後の幽界には、同様なセックス地獄がつくられることになります。

性の退廢は日本だけではなく、現代の世界全体・地球全体の共通の問題であることは言うまでもありません。日本がそうであったように、ある国が経済的に豊かになれば、それともない、セックスの快樂追求がエスカレートしていきます。経済的に恵まれた後も、このパターンを踏まなかった国はありません。経済が豊かになりつつも、健全な性道徳が保

たれた国はありません。こうした退廢的なセックス文化は、現代の先進諸国を覆う共通の傾向となっています。

現代における地球レベルの性の荒廢は、欧米のキリスト教の衰退によって歯止めがなくなったことと、経済発展にともなう物質主義の浸透によって引き起こされました。20世紀における人間性の回復の動きが、性の自由化をもたらすことになったと考える人もいますが、現実には、人間が本能に翻弄されるようになったことが一番の原因なのです。日本はそうした欧米の性の解放と退廢の後を追いかけて今日に至っています。20世紀の後半において、性の墮落傾向は地球規模で急激な広がりを見せるようになりました。性がオープンであることが、さも人類の進化、自由の進展であるかのような愚かしい考えが世界中に蔓延するようになっています。

究極の利己性 — 名誉欲・支配欲

十分なお金を手にし、物質的に恵まれると、人間が最終的に望むものは名誉欲であり支配欲（権勢欲）です。人から偉く思われたい、人より優れた存在でありたい、そして周りの人々を自分の言いなりにさせてみたいと思うようになります。初めは謙虚であった人も、人の上に立つようになると、いつの間にかこうした欲望が頭を持ち上げてくるようになります。他人を思うように動かしコントロールすることが快感になってくるのです。政治家、宗教者、企業家、作家、評論家、芸能人、歌手、学者、社会活動家、官僚ばかりでなく、どのような小さな組織の長においても、「名誉欲・支配欲」の根深さを見ることが出来ます。そして、ここから多くの争いが生じることになるのです。この世の成功者と言われる人々には、名誉欲・支配欲が強く巣くっています。またボランティア活動に熱心に取り組んでいる多くの人々の心の奥にも、名誉心といった利己性が潜んでいることが往々にしてあるのです。

スピリチュアリズムとしての実生活とは、「靈主肉従」の努力、すなわち本能的欲望を抑制する日々の積み重ねに他なりません。それは具体的には、

「金銭欲・物欲のコントロール」「性欲のコントロール」「名誉欲・支配欲のコントロール」ということになります。

次に、それらの一つ一つについて見ていくことにしましょう。

質素な生活

——スピリチュアリストとしての実生活 ①

衣食住に代表される物質には、何一つ霊的な価値はありません。これらは地上で生活するためにのみ存在するもので、必要最低限あれば事足りるのであります。衣食住については、「生活できればそれでよし」といったところで線を引かなければなりません。霊的な成長のために、豪華な邸宅に住む必要はないし、高級車を持つ必要もありません。ファッションナブルな高価な衣服も装飾品も必要ありません。多くの現代人は不健全で贅沢なグルメを求め、肥満し、わざわざ病気をつくり出すような愚かなことをしています。こうした“衣食住”に意識と生活が翻弄されているうちは、霊的に成長することはできません。

もし皆さんの中に、スピリチュアリズムに導かれながらも、こうした物欲に強くとらわれている方がいらっしゃるならば、その方は霊界に行ってから後悔することになるでしょう。お金を儲けることが悪いとか、金持になってはいけないと言っているのではありません。お金があっても質素な生活をしなさいということです。お金の翻弄されないようにしなさい、お金を自分の意志でコントロールしなさい、ということなのです。それが、その人の霊

性の高さを示す明確な指標なのです。余分なお金が入るのは、それを人助けのために使いなさい、持たない者に分け与えなさいということです。自分や自分の家族の快樂・満足のためだけに、お金が与えられているわけではありません。必要以上のお金が入るのは、霊界から自分の内容が試されているのかも知れないということを忘れてはなりません。お金を自分のために使うのか、多くの人々の利益のために使うのかが試されているのです。

肉体にとって無くてはならぬものといえば、光と空気と食べ物と運動と住居くらいのものであります。衣服もそんなにあれこれと必要なものではありません。慣習上、必需品となっているだけです。

〈シルバーバーチ6・204〉

「もし、あなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。

〈聖書マタイ19章21、22節〉



貞節な生活

——スピリチュアリストとしての実生活②

スピリチュアリストとして、セックスについてはどのように考えたらよいのでしょうか。結論を言えば、スピリチュアリストは性欲をコントロールし、清らかな生活を心がけなければならないということです。恋愛関係にあるというだけでセックスは許されるものではなく、婚前セックスもすべきではありません。婚前交渉を認めることは、性の墮落を容認することなのです。当然のこととして、夫婦以外のセックスは許されません。女性ばかりでなく、男性にも貞操が要求されるということです。

このようなことを聞けば、大半の人々は時代遅れの考えのように思われるかも知れませんが、霊的な視点に立てば、それはごく当たり前のことなのです。霊界人にとっては常識的な考えに過ぎません。それが現代人には特別なことのように思われるのは、それほど現代人が“霊的な常識”から掛け離れているということなのです。いつの間にか大部分の日本人が、低俗な性の乱れを異常と感じられなくなってしまっています。異常を異常と考えることができなくなっているのです。それほどまでに、大半の人々の「霊性」は低下しているということです。異常と正常の区別がつかないほど、日本の社会全体が腐り果ててしまっているということなのです。

かつての日本では、女性が貞操を守り、我慢することで、社会全体の墮落傾向に一定の歯止めがかけられていました。女性の忍耐によって、ぎりぎりのところで社会の秩序が保たれてきました。ところが戦後、女性の権利が叫ばれ、男性との同権が認められるにつれ、男性がこれまでしてきたのと同じ性の享楽が女性の間において求められるようになってきました。その結果、人間社会の根底が崩れ、全民族的な退廃・獣化が急速に進むことになってしまったのです。女性の権利の主張は、男性と同じ快楽を求めることではなく、男性にも貞操を要求する形で進められなければならなかったのです。

姦通罪などと言えば、前近代的な時代の産物のように思われがちですが、スピリチュアリズムの観点から言えば、きわめて当然のことです。現在の日本

にも姦通罪が導入されたら、多くの人々はその窮屈さに悲鳴を上げ、海外に逃げ出すようになるかも知れません。しかし“真の霊的救い”を考えた時、そうした窮屈さが国民の上にもたらされることは、むしろ良いことなのです。自由は、墮落退廃のために与えられるものではありません。魂を自発的に成長させるために、またはそのチャンスを他人によって奪われないために保証されるべきものなのです。

最低の「霊主肉従」の努力さえしない者にとっては、自由などむしろない方が、どれだけその人の霊的成長のためになるのか知りません。罪を犯し一生を牢獄で送るはめになった受刑者や、病気で寝たきりになり自分自身の身体さえ思い通りに動かせない病人の方が、本当は霊的にはずっとプラスとなるのです。その意味からすれば、エイズを始めとする性にまつわる病気が人類にもたらされたことは、ありがたいことと言わなければなりません。エイズや性病は、気ままに本能の放縦に流されないようにするための歯止めなのです。何百年か後には、スピリチュアリズムによる「霊的真理」が人類に行きわたるようになりますが、その時には、姦通罪という法律はなくとも、それ以上の高いレベルの健全な性道徳が人々の常識となることでしょう。



謙虚な道具意識

—スピリチュアリストとしての実生活 ③

もう一つの欲望である名誉欲と支配欲についてはどうでしょうか。これらも霊的な未熟さから生じるものですが、霊界の事情が分かってみれば、そうした低俗な欲望にとり憑かれている人々は気の毒としか言いようがありません。こうしたものを求めれば求めるほど、その間違いは、他人からの裏切りや孤独・寂しさという形で自分の身に返ってきます。本当の愛の在り方からずれたことは、“孤独”という痛みによって埋め合わせがなされ、それによって純粋な利他愛に目覚めることができるようになります。こうした孤独の痛みを通じて“名誉欲・支配欲”の間違いに気づき、純粋に見返りを求めることなく与えることの大切さ、無私の奉仕の尊さに目覚めた人は幸いです。

他人より上に立とう、偉くなろうとするのではなく、他人の役に立とうとする以外に、真に人間の生きる道はありません。この世の成功者になろうとする必要性は全くありません。有名人になろうとする必要性もありません。霊界の道具として無私になって奉仕する、自分を忘れひたすら他人に尽くすことだけが、私達のなすべき道なのです。霊界の道具としての謙虚さこそが、本当の幸せである利他愛の喜びをもたらしてくれるようになるのです。

まとめ

「金銭欲・物欲」「セックス欲」「名誉欲」「権勢欲」は、いずれも物質主義のエゴイズムから生じたものです。それらは神の摂理からずれたものであるため、いつか、苦しみ・病気・孤独という痛みとなって自分に返ってきます。

スピリチュアリズムにたどり着いた者の生き方は、物欲に対しては質素、野放しのセックスに対しては清潔さと貞操、名誉欲・権勢欲に対しては霊界の道具としての謙虚さを常に心がけなければなりません。それこそが、スピリチュアリズムに導かれて霊的人生を送るチャンスを真っ先に与えられた、私達の歩むべき道なのです。

精神的にも霊的にも自己を厳しく修養し、生活のすべての側面を折目正しく規制し、自分は本来は霊であるという意識をもって、行動のすべてに霊の優位性を反映させなさい。霊の優位性の自覚にもとづく修養生活——これが最高の生き方です。

〈愛の力・222〉



清らかさを求めての自己克己の歩み ——“性欲”との闘い

最も困難な闘い

私達の靈性は、利他愛の行為を通じて高められるようになってきました。“愛”は人間の靈性にとって何より重要なものですが、それにはさまざまなレベルがあります。最も次元の高い愛は完全な利他愛で、無私の行為・自己犠牲の行為となって示されます。自分を忘れ、ひたすらより全体の靈的向上のために自分のすべてを捧げる行為となって表れます。利他的な愛は純粋な靈的世界に由来しています。

それに対して、肉体の本能から出たものが利己的な愛です。自分にとって大切なものだけを求める愛です。自分の本能的満足や自分の家族の利益を優先するのは利己性の表れです。そうした利己的な愛の中でも、最も低い次元にあるのが“性愛”なのです。性愛は人間の肉体の一番深い部分を支配して、地上人を常に利己的な方向へ引きずっていきこうとします。

さて、私達が肉的本能を抑制し「靈主肉従」に至るためには、この最大のエゴ性である性欲と闘わなければなりません。靈主肉従の努力の中で最高に困難なものが、この性欲との闘いです。地上人にとって一番コントロールし難いものが、性欲の問題なのです。神は地上の人間に、靈的成長のための努力として「性欲のコントロール」という課題を与えられました。神は人類に性の自由という特権と同時に、それを靈的成長のためのチャンスとして活用する道を与えられたのです。

キリスト教の“靈肉二元論”の間違い

これまでキリスト教では、靈と肉の闘いということを経験してきました。キリスト教における靈と肉の問題は、神とサタンの対立に関連づけて考えられます。キリスト教では、神＝靈、サタン＝肉という図式で、靈肉の問題をとらえるのです。そこでは人間内部の靈と肉との闘いは、神とサタンの闘いとい

うこととなります。そして肉体の欲望は“悪”として決めつけられ、敵視されることになりました。特に性欲は悪の権化そのものとして考えられ、人々には異常なまでの禁欲が求められてきました。

「靈的真理」に照らした時、こうしたキリスト教における理解は明らかに間違っています。靈界にはサタンはいませんし、原罪も存在しません。そもそも神によって与えられた性欲が悪であるはずがありません。“悪”とは、スピリチュアリズムの靈的真理にそって言うならば、肉主靈従に陥り、靈が肉体に閉じ込められて靈的成長ができないマイナスの状態のことなのです。肉体や性欲自体が悪であるということではありません。神によって造られたものは、すべてが善いものであり、性欲も神によって与えられた以上、悪ではありません。靈によってコントロールされている限りにおいて、性欲は魂の成長にプラスになるものとして、人間に与えられているのです。

イエスの示した厳しい“内面基準”

聖書の中には——「だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。もしあなたの右の目が罪を犯させるなら、それを抜き出して捨てなさい。五体の一部を失っても、全身が地獄に投げ入れられない方が、あなたにとって益である。」（マタイ5章28、29節）というイエスの言葉があります。この聖句が、肉＝悪というキリスト教の間違った“罪観”を強力に推し進めてしまったことは事実です。これを見るかぎり、性欲は最悪の存在のように受け取れます。この聖句を絶対的な基準とするならば、地球上に住む男性はすべて地獄に行くこととなります。この言葉を守ることでできる男性は、地上には存在しないはずで、イエスはそうした実情を知った上で、こうした最高に厳しい

“内面基準”を示したのです。

この厳しい基準をクリアすることができるのは、肉体のない霊界の人々に限られます。しかし唯一イエスだけは例外として、地上人でありながら、この清らかさのレベルを維持できたのです。イエスだけは、“情欲”という獣性から無縁であったのです。キリスト教ではそのイエスの特殊性を、原罪のない神の一人子ひとりごとして説明しますが、ニューズレター8号(新年号)で述べたように、現実には原罪はない以上、この説明は間違っています。イエスといえども、肉体を持っていた以上、性欲がなかったわけではありません。もし性欲がないとしたら、肉体的な片輪ということになります。

靈訓ではそれに対して、イエスの肉体は一般人とは異なり浄化され清らかであったと、隠れた秘密に言及しています。この言葉の真意は、イエスにおいては「霊主肉従」のバランスが、極めて大きく霊に傾いていたため、霊の支配状態が強かったということの意味しています。イエスにあっては、日常的に「霊優位」の状態が維持されていたということです。そのため性欲自体が浄化され、この世の男性のような情欲にはならなかったのです。肉体の特別な浄化のため、また強力な霊的エネルギーを絶えず受け入れていたため、性欲は存在しても、情欲は存在しなかったということなのです。ゆえにイエスは、男性であるにもかかわらず、情欲の思いで一度も女性を見たことがなかったのです。

私達も深い祈りの後には、霊的エネルギーに満たされ、情欲の思いから完全に解放される清らかな瞬間の時を持つことがあります。イエスには、そうした高められた霊的な状態が継続してあったのです。そうであればこそ、イエスは先程述べたような、“性欲”に対する厳しい分別レベルを人類に示すことができたのです。



キリスト教徒の“罪意識”

さて、イエスの示した厳しい内面基準のため、男性修道者の中には去勢をするような者まで現れることになりました。性欲の中に最高のエゴ性が現出します。情欲の炎は霊的な清らかさから最も遠いもので、まさに獣性というべきものです。そのため、この醜さに全力で闘いを挑み、去勢にまで及んでしまったのです。私達は、そうした清らかさを求めて闘いをしてきた修道者達を、一方的に非難することはできません。醜い本能性の思いをなくそうと血みどろの闘いをしてきた彼らを、現代人の誰もが非難する資格はありません。

敬虔なクリスチャンが自分を罪人であると意識するのは、どうしても克服できない、この“情欲”の壁にぶつかった時です。クリスチャンが自己の清らかさに最も自信を失うのは、この時です。そして自分は偽善者であると自分自身を非難してきたのは、この情欲の壁に突き当たった時だったのです。彼らにとって肉は悪でありサタンであると思えばこそ、肉体を傷めつけることは決して悪いことではありませんでした。キリスト教の罪観は確かに間違っています。しかし、清らかさを求める方向性とそのための内面の闘いは間違っていない。肉欲の放縱を善しとして、これに身を任すことに罪悪感を感じなくなっている現代人と比べ、彼らがどれだけ霊的な清らかさを持っていたのかは言うまでもないでしょう。

ニューエイジでは従来のキリスト教における間違った信仰について、これを根本的に否定しようとしませんが、霊的な清らかさという点においては、クリスチャンの方がはるかに優れています。ニューエイジには“霊的な清らかさ”という視点が乏しいため、真に霊的なものが何であるのかが判断できません。そのためキリスト教における正しい点までも、否定することになってしまっているのです。これはニューエイジにおける大きな問題点です。性欲に対する“禁欲”は、人間性を抑圧する偏狭な道徳でないどころか、「霊的成長」にとっては欠くことのできない正しい努力なのです。

清らかさの決定——性欲との闘い方

その人の霊的な清らかさは、性欲に対する姿勢においてははっきりと示されます。セックスにルーズであったり、セックスばかりに意識を向けている人間が、高い霊的心境に至ることは決してありません。歴史上の人物で、誰が本当に優れた「霊性」を持っていたのかは、彼らの性欲に対する姿勢によって判断することができます。

トルストイの作家活動の後半におけるキリスト教への傾倒と性欲との闘いは、よく知られています。彼は晩年に『クロイチェルソナタ』や『性欲論』などを著し、禁欲生活の重要性を述べています。また日本の親鸞も、性欲について深く掘り下げた人物として知られています。性欲との闘いに対する親鸞の率直な態度は、彼の清らかさを求める姿勢を示しています。禁を破って山里へ降りて女性を求めたり、あるいは陰でコソコソと性欲処理をする僧侶の現状の中で、妻帯に踏み切ったことは、清らかさを限界まで追求した彼の心の純粋さを示しています。パウロもこの親鸞と同じようなテーマについて述べています——「私のように、一人でおれば、それが一番よい。しかしもし自制することができないなら、結婚するがよい。情の燃えるよりは、結婚する方がよいからである。」（コリント前7章8、9節）またインドのガンジーは——「今日一日、私はよい夫であった」と述べています。これは、今日はセックスの欲望に打ち勝って妻とのセックスをしなかったということを意味しているのですが、ここにはガンジーが、いかに清らかな世界を求めていた人物であるかが示されています。

困難な男性の性欲コントロール

イエスの述べた厳しい内面基準は、スピリチュアリズムの観点からは正当なものであり、私達が当然目指すべき目標となります。しかしその目標は、独身の若い男性にとっては想像を絶するような厳しいものであり、ほとんど実行不可能と言ってもよいでしょう。それを実行しようとするれば、どれほどの苦しみと絶望が待ち受けているのかが、容易に理解されます。若い男性にとっての霊と肉との闘いは、まさに性欲との闘いにあると言っても過言ではありません。しかしいかに困難であっても、高い理想を目標として努力しなければなりません。ガンジーが、「今日一日、私はよい夫であった」と言ったような率直な姿勢を手本として、一日でも、少しでも多く、清らかな時間をつくり上げるための闘いをすべきなのです。

現在の社会には、あまりにも情欲を誘発する刺激が満ち満ちています。その中で、見るもの聞くものを聖別することは大変です。2日、3日と真理を読み祈りをして高めた心も、一歩街に出た途端、アツという間に崩されてしまうかも知れません。また時には性的な妄想が次々と湧いてきて不安定になり、それを制することができなくなるかも知れません。そうした敗北の苦い経験を繰り返し——「清らかさを保つのは何と難しいことか、自分は何と醜い人間なのか」と絶望の底に叩き落とされるような、惨めな思いを味わうこともあるでしょう。初めから負けることが分かっている闘いなどもう止めてしまおうと、諦めようとするかも知れません。

そのような時、情欲とは無縁な女性があまにも清らかに映ることでしょう。女性の清らかさが羨ましく感じられることでしょう。また一刻も早く霊界に行って、醜い情欲の思いから解放されたいと考えるかも知れません。霊界にしか、もはや望みはないように思われるかも知れません。あるいは性欲は肉体の生理現象で正常なものだから、排泄するのは当然だと居直ってしまうかも知れません。しかしこれこそが、まさに歴史上の修道者の誰もが苦しみ抜いてきたことなのです。そして現在でも、清らかさを求めようとする全ての人間が、例外なく直面しな



ればならない内面の闘い・醜さとの闘いなのです。

性欲との闘いは、私達が清らかな思いを心に宿し、清らかさを深めていくための努力に他なりません。年をとってからも、清らかな心境を求める情熱と姿勢を失ってはなりません。「もっともっと清らかになりたい」という思いがなくなれば、もはや「霊的成長」は望めないのです。

闘うこと自体に価値がある

—— 諦めずに闘い続けなさい

忘れてはならないのは、清らかになろうとして闘いをする事自体が、その結果にかかわらず、すでに高いところに身を置いているということです。結婚して好きな時にセックスができる人達は、もはや清らかさを求める厳しい闘いからは縁遠くなります。好きなように性欲を満たせる状況にある中では、清らかさへの感度も意欲も薄れてしまいます。若い時には敗北の連続であったとしても、清らかさを求めての闘いに臨めるというそのことが、この世の男性とは異なる、格段に高い世界にいることを示しているのです。たとえ闘いに負けることがあっても、清らかさを求めて闘うその姿勢は、魂を高みへ押し上げることとなります。少しでも清くありたいと抵抗することこそが大切なのです。

若い時に性欲と正面切って取り組んだ人とそうでない人とでは、内面の清らかさと深さにおいて、大きな差が生じます。年をとってから清らかさの感性を深めることは、とても難しいのです。若くて、多感・敏感・繊細な心を持っていればこそ、清らかさの感性を育み深めることができるのです。常に性欲に負け続けてばかりであったとしても、諦めずに闘いに挑む姿勢が、心を高い世界に導いていくのです。性欲との闘いは、積み上げた石をまた崩すような虚しい闘いであるかも知れませんが、それでも諦めずに闘い続けていって欲しいと思います。それが霊的に見た時、計り知れない大きな永遠の宝をもたらすことになるからです。若い時に性欲との闘いの経験を持たなかった者は、将来、霊的に深くなることはできません。若い時に性欲の放縦に染まり切った者は、霊的な不具者となってしまうのです。

性欲との闘いは本当に苦しいものです。しかし、それは霊界に行った時には完全になくなります。まさしく“死”は清らかさを求め続けてきた人にとっては、苦しみからの解放の時となります。地上の醜さから解放される喜びの時となるのです。清らかさを求めて闘ってきた者と、性欲を肉体生理の当然の現象として放縦に身を任せてきた者とは、地上にいる間に、天と地ほどの大きな「霊性の差」をつくり上げることになるのです。

性欲との闘いをしている者と、性欲の放縦に身を任せている者とは、全身から放射される清涼感が全く異なります。その清らかさの違いは、霊的感性の敏感な人には簡単に見分けられます。

また霊能者として霊界のスピリットとコンタクトする立場にある者にとって、性欲との闘いは最も強く求められるものです。性欲に翻弄されている霊能者ほど、霊界の低級霊にとって付け入りやすい存在はありません。性欲との熾烈な闘いをしていない霊能者、清らかさのない霊能者は、すべて低級霊の侵入を受けていると言っても間違いありません。



性欲コントロールは「霊主肉従」がポイント

性欲コントロールの最も効果的な方法は、できるだけ強力に「霊主肉従」の状態をつくり出すということです。霊的真理を読み、瞑想や祈りをする事で霊的エネルギーが蓄えられるようになると、情欲の妄想はサッと消え去ります。こうした闘いによって情欲の嵐が静まり、清らかな世界に入った時は、心の底から勝利感が湧いてくるはずで

す。バーバネル（シルバーバーチの霊媒）と友達であり、シルバーバーチの交霊会にも出席して何度か直接指導を受けていた、テスターというイギリス人ヒーラーがいました。彼は自分の著書の中で、キリスト教の“禁欲主義”を非難しています。マスターベーション（自慰行為）を禁じているから若者は欲求不満になり、いろいろな問題を起こすことになると言っています。そしてマスターベーションを認めるべきだという意見を述べています。しかし「霊的真理」に照らしてみれば、その考えはやはり間違っています。彼の率直な人柄がそうした発言をさせたと思いますが、たとえ実現不可能なことと分かっているとしても、目標は完璧なもの、理想的なものでなければなりません。闘いに負けた結果マスターベーションに走ってしまうことがあっても、それを初めから善いものとして認めることはできません。（*女性の生理と同様、男性の夢精は自然な生理現象です。射精の瞬間、エロチックな夢を見ることが普通ですが、覚醒時における霊的コントロールの力が強くなるにつれ、夢精中においてもコントロールできるようになっていきます。しかし、これは一人一人の内容によって大きな差があるため、ここではそれ以上のことを述べるのは差し控えます。）

若い男性が一人で生活する時は、性欲の誘惑を克服することは至難の業です。一人で身を清く保つということが、いかに困難なことかを実感するはずで

す。しかし、もし若者二人と一緒に生活するなら、誘惑に流されることはずっと少なくなります。誰かといることによって適度な緊張が保たれ、はるかに身を清く保ちやすくなります。また肉体が疲れ過ぎ意志の力が弱くなった時や、何らかの大きなショックを受けたり、緊張を強いられた後には、性欲の衝

動が襲ってくるものです。性の情報が乱れ飛び、絶えず刺激にさらされる中であって、若い男性が一人でいることは、狼の群れの中に子羊がいるようなものなのです。一人の力では到底抗し切れるものではありません。

肉体が病気などで弱った時は、自然に性欲が後退します。従って意識的にそれと同じ状態をつくれば性欲は減退します。そのための方法として、断食が修道生活においては勧められてきたのです。一週間に一日を断食の日に決めることは“霊的浄化”のためには良い方法です。この日をもって一週間分の身の清めをします。また飽食に陥らないようにすること、飲酒を避けることも大切です。

*ヨーガにおけるクンダリーニの上昇とは、霊的エネルギーを高め、性欲をコントロールする過程を別の形で説明したものです。瞑想によって霊的エネルギーが高められ、「霊主肉従」の状態ができると、性欲がコントロールできるようになります。

夫婦間のセックスはどうあるべきか

——夫婦間の性のコントロールの必要性

パウロは、結婚した男女に対して次のように言っています —— 「合意の上で祈りに専心するために、しばらく相別れ、それからまた一緒になることは、さしつかえない。」（コリント前7章5節）パウロは、結婚してからも二人が清らかな意識を持ち続けることの必要性を言っています。

たとえ夫婦であったとしても、嫌がる相手にセックスを強要することは許されません。それは動物にも劣る本能剥き出しの最も醜い行為と言わざるを得ません。こうした家庭内暴力に対して、最近になってメスが入られるようになったことは社会として大きな進歩と言えます。では二人が同意する限り、自由にセックスしても良いのでしょうか。こうした質問は、現代人にとっては全く馬鹿げたことのように思われるかも知れません。「そんなこと当たり前じゃないか」「夫婦がお互いに同意している以上、何の問題があらうか」——これが大半の人々の答えです。しかし先程のパウロの言葉は、こうした現代

人の常識に対して、異議を唱えるものなのです。

夫婦二人がセックスに同意したとしても、それはどこまでも肉体レベル・本能レベルでのことに過ぎません。二人が何より霊的世界とそこでの結び付き（霊的結び付き）を優先するのではない限り、たとえ気持ちが一致したことであっても、霊的に“善”とはならないということです。霊的なものをそれぞれが優先するために、夫婦間のセックスを一時中断するのは良いことであるとパウロは言っているのです。これはスピリチュアリズムにおけるセックスの在り方を説いています。理想のセックスとは、お互いが霊的成長を最重視し、霊的な結び付きをセックスよりも優先するという前提がある時に、初めて成立するものなのです。単なる肉欲の快樂と喜びを、霊的意識よりも優先するところに、霊的なセックスはあり得ません。お互いが、必要な時には性欲をコントロールすることができる、というところにおいてのみ、理想的なセックスが成立するということです。

率直に言えば、セックスはなくてはならないというものではありません。セックスレスは夫婦愛の危機のようによく言われますが、本当に霊的に深い世界で結び付いている夫婦にとって、セックスは二の次なのです。セックスができなければ愛し合えないというものではなく、むしろセックスをコントロールする努力の過程で、二人の間に本当の深い愛が育まれることの方が多いのです。セックスの快樂に溺れた二人が、霊的に深く結び付くことはありません。かならず“飽き”がきてしまうのです。すべてが肉的レベル・本能的レベルであるからです。霊的レベルにまで至らない限り、愛は必ず飽きがるようになり、苦痛へと変わっていきます。年老いた夫婦がセックスから遠ざかるのは、自然の成り行きです。年老いてなお性欲が旺盛なことを賛美するような風潮もありますが、愚かなことです。もちろん年老いたらセックスをするなということではありません。霊的関係が深まっているか、セックスなしでも深い愛情関係をつくることのできるのかということなのです。

年若い夫婦であっても、性欲をコントロールすることの大切さを知っておくべきです。必要な時にはセックスを遠ざけることができこそ、霊的関係を

育んでいくことができるのです。そしてそれが結局、二人に本当の喜びをもたらすことになるのです。肉欲の喜びしか知らない者は“霊的不具者”です。霊的な喜びを知らない人はかわいそうな人間です。肉欲コントロールの必要性を知り、それを実行できる二人においてのみ、地上のセックスは存在価値を持つようになります。初めて獣とは違った存在になることができるのです。二人が性欲のコントロールをするもとのみ、セックスの喜びは追求されるべきものなのです。お互いが率先してセックスをコントロールするというのも、この世の人々にはない、すばらしい夫婦愛の在り方であり、霊的努力の道であることを知っておくべきでしょう。

女性の性愛との闘い

独身の男性が身を清らかに保とうとすることは、本当に大変な克己の努力が要求されます。女性はそうした男性の持つ“情欲”とは無縁です。男性のような抑えがたい激しい性欲との闘いは必要ありません。しかしその代わりに、男性とは異なる別の苦しみと直面しなければなりません。女性にとって、本能から生じる利己的感情の起伏は男性よりも激しく、それゆえ男性と比べ多くの感情的苦痛を持つようになります。利己的な感情との闘い、すなわち“嫉妬”などのマイナスの感情との葛藤が、男性より強くなります。男性が性欲コントロールで苦しむように、女性も自己の醜い感情で苦しまなければなりません。女性は感情コントロールにおいて、男性よりも多くの内面の闘いと苦しみが要求されるのです。「魂の成長」を求める限り、こうした苦しみと直面せざるを得ないのです。

そうした利己的な愛・ジェラシーは、自らの心を常に“霊的視点”に立たせることにおいてのみ、乗り越えられるようになっていきます。相手の人間より、神と霊界を優先することによって、初めて克服することができるのです。自分のことより相手の霊的成長を願う利他愛の努力を通じて、利己的感情・醜い感情は少しずつ浄化されていくのです。男性であれ女性であれ、地上において「霊的成長」をなすためには、必ず苦しみがともなうということなのです。

どちらでもよいことに、いつまでも関心を 向けていてはなりません。 宇宙人・UFO・超古代大陸文明について

先号に引き続き、どちらでもよいものとして、宇宙人・UFO・超古代大陸文明について述べることにします。

宇宙人は、どちらでもよいもの

宇宙人とUFOは“超常現象”に似ているところがあるため、しばしば霊的な世界に関心を持つ人々の興味を引いてきました。しかし宇宙人もUFOも、その存在自体が疑わしい上に、私達の魂の成長とは直接関係しない、どちらでもよいものです。必要以上に関心を向けるようなものではありません。それらへの過剰な好奇心は、「魂の成長」という最も肝心な世界から焦点をずらしてしまうことになります。

シルバーバーチは、次のように言っています。

人間はどうでもよいことにこだわり過ぎるように思います。(中略)火星にも人間のような存在がいるのだろうかとか、(中略)そんなことを心配してはいけません。

(シルバーバーチ10・184、185)

大切なのは宇宙人か霊界人か？

私達がまず意識を向けるべき対象は、宇宙人ではなく「霊界の人々」でなければなりません。いつか必ず死を迎える地上人にとって、霊界の存在は最大の関心事であるはずですが、それに比べ他の天体は、私達の死後とは直接的に関係するものではありません。死後、誰もが必ず行くことになるのは、他の天体ではなく霊界なのです。

さて現在の地球にとって最大の出来事とは、霊界

あげての人類救済活動が、今現実に進行しているということです。その大プロジェクトは、イエスを頂点とする高級霊団の組織的活動によって進められています。そしてそれが功を奏し、地球は徐々に変革されてきたのです。他の天体から来た宇宙人によって、人類救済活動が進められているわけではありません。宇宙連合があって、そのもとで地球の浄化が計画・推進されているわけではありません。この点をしっかりと押さえておかなければなりません。地上人類の運命は、霊界からの働きかけによって決せられてきたのです。

私達の知らない遙かかなたの天体に宇宙人が存在しているのは事実ですが、現時点において、私達地上人と直接的な係わりを持ってはいません。宇宙人の存在が、地上人類に特別な影響をもたらすとか、重要な意味を持っているわけではありません。実際には、どちらでもよい存在なのです。死後における霊界での生活、そしてそのための地上人生こそが、私達にとっての全てなのです。宇宙人とか他の天体といったどちらでもよいこと、何の意味もない単なる好奇心レベルのことに、いつまでも関心を持っていてはなりません。

地球人も宇宙人も同じ“霊界人”

広大な宇宙の中には、地球人以外の生命体としての宇宙人は確かに存在しています。シルバーバーチも、彼らと霊的に直接会って語った体験を述べています。またマイヤースも、太陽系惑星の半物質次元世界での宇宙人の存在について述べています。しかしそれは、UFOがらみで登場する宇宙人や、ニューエイジのチャネリングなどで出てくる宇宙人と同じものを指しているわけではありません。

ここで少し視野を広げて考えてみましょう。宇宙

人の住む天体は、地球と同じくどこまでも物質次元の世界です。当然そこに住む人々も、私達地上人と同じような肉体（物質的身体）を持っています。私達と同じように肉体の死もあります。そして死後は、私達と同じように霊界に行くこととなります。物質世界→死→霊界というプロセスは、全く同じなのです。重要なことは、私達地球人にとって霊界が本来の世界であるように、彼ら宇宙人にとっても霊界が本来の世界であるという点です。すなわち、霊界は、地球人と宇宙人にとって共通の一つの世界であるということです。つまり地球人も宇宙人も、霊界という同じ世界の住人なのです。ともに霊界を母国とする「霊的存在」という点こそが、地球人・宇宙人における最も本質的な共通点なのです。そうした事実があるために、地球人も宇宙人も同じ「神の子供」となっているのです。神を拝するのは地球人だけではありません。すべての宇宙人も私達と同様に、「霊的親」である神を拝しています。霊界こそが、地球人・宇宙人にとっての共通の母国であることを忘れてはなりません。

こうした観点に立って考えた時、ある宇宙人からの通信が共通の世界（霊界）を前提としていない場合には、明らかにおかしいと思わなければなりません。物質次元の天体・宇宙だけに限定した話をしていたり、宇宙人であることをことさら強調しているような場合には、疑ってかかるべきです。その通信は100パーセント、低級霊のからかいだと思って間違いありません。霊的世界ではなく物質世界に視点を合わせていること自体が、私達地球人の「霊的成長」を優先していないことの証なのです。まさに“低級霊”の仕業であることを示しています。

自分の前世は宇宙人？

最近では、自分の前世が宇宙人であったと公言する人達が増えています。しかし、そうした人達の“宇宙人前世譚”の根底には、自分の前世が歴史上の有名人であったとか、レッドインディアンであったと言って自慢するのと同じ思いが潜んでいます。それは、ただ自分がそう感じたとか、リーディングでそう言われたとか、そんな夢を見たという程度の

全く根拠のないものです。その多くが、単なる虚栄心や自己顕示欲に絡んだところから出ています。

今述べたように、もともと私達は広い意味では宇宙人なのですから、自分の過去世が宇宙人だったなどと言うことは、地球上にいて日本人と外国人の区別にこだわるのと本質的には同じことです。そうした発言は、何より私達の本質が「肉体をまとった霊」であることに対する無知さを表明しています。私達は肉体（物質）をまとった霊であり神の霊的子供と言えますが、そのことは人間という存在は、地球人や宇宙人である以前に「霊的存在」であることを意味しているのです。

また仮にある人の前世が宇宙人だったということが事実であったとしても、それが特別、その人のすばらしさ・優秀さを証明するものではありません。霊界通信では、他の天体から地球へ再生するのは、その天体で十分な進化を果たすことができなかった者、霊性の劣った者であると言われていています。つまり地球への再生には、懲罰の意味があるということです。いずれにしても、前世が宇宙人であったなどというのは取るに足らないことです。そんなことより大切なのは、この地上生活を通じて霊的な未熟さを埋め合わせ、魂を成長させるということです。もっとも前世が宇宙人であると言う人の大半は、事実ではありませんが……。

他の天体からの転生とは

ある人間の前世が宇宙人であったというのは、“本体我”（霊的アイデンティティー）の一部が地球以外の天体に誕生した経験があるということです。それは霊的観点から見れば、パーソナリティー（地上の人物像）を表現した場所が他の天体であったということに過ぎません。どこにパーソナリティーを出現させるかは、霊的な本質にはさして重要ではありません。そんなことより、物質次元での生活を通して霊的成長がなされるのかどうかということが問題なのです。私達は霊的存在として、永遠に霊的成長のプロセスをたどっていきますが、そのことが人間にとって最も本質的で重要な点なのです。自分が宇宙人であったかどうかは、どちらでもよいことです。

今、魂を成長させるために地球人としての人生を歩んでいるという事実だけが意味のあることなのです。

自分は宇宙人であったなどとわざわざ公言することは、再生についての事実と「霊的真理」に対する理解の乏しさを示しています。自分の前世を詮索することが無意味であるのと同様に、自分の前世が宇宙人であったなどというのは全く意味のないことなのです。

“低級霊”のからかい

すでに述べましたが、地上人類の救済・地上人類の霊性の向上という問題は、地上人みずからの責任によってなされなければなりません。そのために高級霊界において、地上人類の救済計画が立案され実行に移されてきたのです。その意味で、物質次元に生きる他の天体からの渡来者（宇宙人）によって、地球の救済活動が進められていくことはあり得ません。霊界において全地球的規模でのプロジェクトが進行している中であって、その動きに呼応することなく、またそうした動きに配慮を示すことなく、他の天体から直接地球に働きかけるというのは、おかしなことです。作り話を語って人々を惑わせ、真実から遠ざけようとしていることは明らかです。あるいは人々をからかい翻弄しようとしているのです。そんなことをするのは言うまでもなく、宇宙人ではなく“低級霊”なのです。



* 『バシャール』について

1980年代後半から、バシャールと呼ばれる宇宙人からの“チャネリング”（霊界通信）が、日本のニューエイジャーの中で大変評判になりました。バシャールが、日本におけるチャネリングブームをつくり出すきっかけになったと言われていました。しかし今述べたように、地上人類の霊性向上のための大事業がイエスを頂点としてすでに進展しているこの時、宇宙人を名乗るバシャールの正体が本物でないことは明らかです。バシャールは現実には展開している地球上最大の動きと、その組織の最高責任者であるイエスについて言及していません。あえて言わなかったのか、あるいはそうした動きに気づいていなかったのか、いずれかの可能性が考えられます。

バシャールからの通信内容のほとんど全ては、それ以前のニューエイジで言われてきたことばかりです。（*もちろん部分的には、スピリチュアリズムの霊的真理と共通なものも含まれていますが……）それらに、バシャール独自のポジティブシンキング（*彼はそれを、ワクワクする生き方の追求・実践と言っています）と多次元世界観・人間観が付け加わっています。こうした一連の内容がニューエイジャーに受けることになったのです。

しかし結論を言えば、バシャールの通信内容は、その大半がチャネラーであるダリル・アンカから出たものに過ぎません。チャネラーが個人的に学んで得た知識がチャネリングとして語られているのです。ダリル・アンカが意図的に詐欺を働いているのか、あるいはトランス状態で潜在意識にあるこれらの知識を吐き出すようなプロセスが生じたのか、あるいは低級霊がからかいの目的でダリル・アンカの潜在意識を用いたのか、いずれかのケースが考えられます。

彼独自のポジティブシンキング（ワクワクする生き方）は、ダリル・アンカの個人的な人生観に過ぎません。またセッションの参加者を煙に巻くような多次元世界観・人間観は、それ以前のチャネリングですでに言われてきたニューエイジの形而上学を、ダリル・アンカが自分流に解釈した（？）ものをバシャールに語らせているに過ぎません。（*ニューエイジの形而上学の間違いについ

また前号の時間論・空間論の箇所でも述べましたが、『セス』や『ラザリス』といった良質のチャネリングでは、スピリチュアリズムと全く同じ「類魂鏡」に立っています。そしてそれを説明するために、多次元世界・多次元人間という用語を用いています。それをニューエイジでは間違っ^て解釈し、“パラレル世界論”という奇妙な形而上学をつくり出してしまいました。誤解と空想的想像力によってでき上がったものがパラレル世界論ですが、バシャールは、わざわざその間違っ^た世界論を宇宙から届けているのです。これは宇宙人バシャールからの通信と言われるものが、霊媒ダリル・アンカの個人的な見解であることを物語っています。バシャールの言う多次元世界論は、バシャールのもではなく、単なる霊媒の考えなのです。

このようにバシャールの語る内容は、その大半がそれ以前にあった地上の知識の単なるコピーに過ぎないのですが、それを宇宙人が語るということで、聞く側の人間に何か特別大きな真理のごとく受け取られてしまいました。バシャールの通信は、チャネラーの個人的知識を土台としてつくり上げられたものであり、その内容はすべてチャネラーの知識に限定された、きわめて脚色性の強いもの、詐欺性の強いものであることが分かります。しかし、それがUFO信奉者であるチャネラーを通じて宇宙人バシャールからの通信として語られたため、世間一般に流行してしまったのです。

こうした程度の悪いチャネリング（霊界通信）には、必ず低級霊の関与がともないです。バシャールの通信の中にどの程度まで低級霊がかかわっているのかは、すぐに決めることはできません。通信の部分的なものにとどまっているのか、あるいはダリル・アンカを完全にコントロール下に置いたものなのかは判断がつかねます。しかし、いずれにしても純粋な本物のチャネリングでないことは確かです。

バシャールの通信には、低級霊であってもこの程度のこととは言えるという内容しか見当たりません。地上でも、霊性が低く品性の劣る人間が霊的真理を語り愛のすばらしさを説くことがあります。そこには当然のこととして、内容の深さがともなっていません。それと同じように、バシャールの通信内容には「霊的真理」に対する深い洞察が見られません。低級霊であればこそ、地上人の歓心

を買うために、さも高級霊のような振りをする人が多いのです。そして一見それらしい道理の通った話をしますが、そこには高級霊訓のもつ雰囲気はありません。人を煙に巻くような理屈っぽい言い方をする一方で、上辺のつじつまを合わせたような通信内容が並べられています。遥かかなたの宇宙から、わざわざこの程度のことを地球に伝える必要性がどこにあるのでしょうか。語る内容の深さの差は、シルバークーチを始めとする「高級霊訓」と比べてみれば一目瞭然です。

本当は“宇宙人”と名乗っているのを聞いた時点から、これは低級霊のいたずらか、チャネラーの詐欺が潜在意識によるものか、いずれかであると判断すべきだったのです。宇宙人を装って地上人を驚かせ、惑わせようとしている“低級霊”の存在を見抜くべきだったのです。関係者はバシャールに対して、どれだけ徹底した身元確認の厳しい質問をしたのでしょうか。理性が納得するまで、ソースのレベルを見極めることが最低限必要なのです。多方面からの厳格なチェックをしていけば、必ず不確かな点が出てきたはずなのです。こうした当然のプロセスを踏むことなく、いつの間にか低級霊の思惑通りに、あるいはニセチャネラーの願い通りに、バシャールの存在は流行に乗ってしまいました。

繰り返しますが、私達にとって重要なのは宇宙人ではなく「霊界人・背後霊」なのです。またUFOではなく、地球救済のすべてを取り仕切っている「高級霊団」なのです。



U F Oは宇宙人の乗り物？

U F Oは宇宙人の存在との関係で、これまで大きな議論の的となってきました。U F Oとは“未確認飛行物体”のこと、すなわち天空中に目撃される正体不明の物体のことです。そして、その大半（90%以上）は科学的なチェックによって、飛行機や人工衛星の見間違いであったり、光線によって引き起こされた現象の誤認であることが明らかにされています。

しかし中には依然として正体不明なものもあります。それを宇宙人の乗り物の可能性が高いと主張する人々がいます。正体が明らかでないといっても、現時点では分からないというだけのことであって、それが宇宙人の乗り物に結び付く根拠も関連性も全くないのですが、そうした人達は、どこまでも異星に住む宇宙人が地球にやって来るための乗り物であると主張するのです。現在では、U F Oが宇宙人の乗り物であることを固く信じて疑わない人々によって、一つの新興宗教・U F Oカルトのような状況が作り出されています。スピリチュアリズムの中にも、U F Oが宇宙人の乗り物であると信じている人々がいます。

U F O神話の推移

U F Oの存在が人々の話題に上るようになってきたのは1947年以降のことです。この年、米国の実業家が空飛ぶ円盤（フライング・ソーサー）を見たという事件が起き、さらに“ローズウェル事件”というU F O史上、記念碑的な事件が起きました。これは墜落したU F Oの残骸と、それに乗っていた宇宙人の死体が回収されたという事件です。そして死体は軍によってどこかに運び去られ、隠蔽されたということになりました。この事件は、その後の調査で全貌がかなり明るみに出され、U F Oが宇宙人の乗り物であったという見解は完全に否定されています。宇宙人の死体の回収についても、詳細な調査によって、そうした事実はなかったことが明らかにされています。しかし円盤に乗った宇宙人が地球に飛来しているという噂は、その後、米国各地で頻発

したU F Oの目撃情報によって増幅されていくことになります。

そうした時に、U F Oのイメージづくりに決定的な役割を果たしたのがアダムスキーでした。彼は宇宙人とコンタクトし、U F Oに乗せてもらったという体験談を著し、さらにU F Oの写真まで公表しました。このアダムスキーによって、人々のU F Oや宇宙人についてのイメージは大きく決められることになりました。しかし後に、彼の体験談のすべてが意図的な作り話であったことが明らかにされ、また公表したU F Oの写真からは、コンピューター解析の結果、円盤を吊り下げている糸が発見されています。

その一方で、U F Oの円盤形イメージづくりに大きな影響を与えたのが、米国で1950年代につくられた一連のS F映画であると言われています。それ以前のU F Oのイメージがロケット形であったのが、このS F映画で円盤形として描かれるやいなや、U F Oは円盤形としてのイメージが定着することになりました。

他のU F Oに関する重大な事件としては、宇宙人に誘拐されてU F O内に連れ込まれ、身体検査をされたという“アブダクション事件”があります。この事件は、宇宙人がすでに地球に来ている証拠として大きな話題を巻き起こしました。ベティ・ヒル事件は最も有名なアブダクションですが、科学的な調査によって、その事件の実態はかなりの部分に至るまで解明されています。事件の被害者が語った宇宙人やU F O内部の様子は、本人の潜在意識の中しまわれていた映画のシーンの記憶を土台にして催眠術——事件後受けた催眠療法によって作り上げられた偽の記憶（フィクション・ストーリー）であることが明らかにされています。被害者は催眠状態で、自分自身によってつくられたフィクション・ストーリーの生々しさに、本当にアブダクションに遭遇したかのように思い込んだのです。

またU F Oの特徴として、地上の飛行機では考えられないような鋭角的なジグザク飛行が挙げられます。U F O信奉者は、これを地球上には存在しない乗り物、すなわち宇宙人の乗り物の証拠と考え、宇

宙人が地球人とは比較にならない高度な知性と文明を持っていると主張しました。しかし現在では、大脳の研究によって、そうした物体の動きは“脳”によって生じた反応であることが明らかにされています。

U F O信仰は“狂信的カルト”と同じ

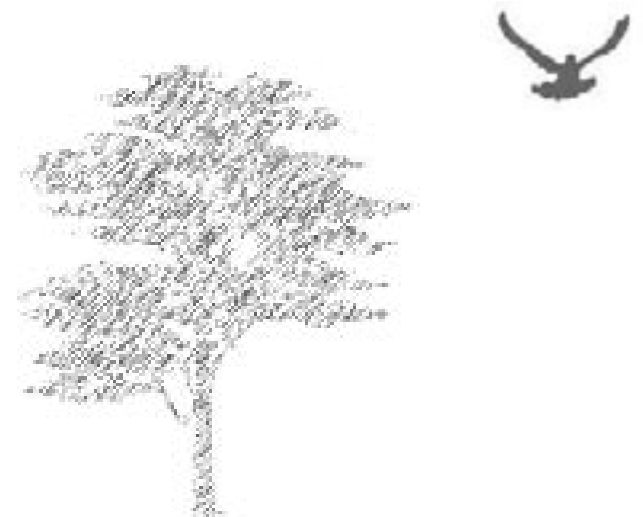
以上が現在に至るまでのU F Oブーム・U F O信仰のあらましですが、今日まで、U F Oが宇宙人の乗り物である証拠も、宇宙人が地球人に接触した証拠も、また宇宙人が地上にいる証拠もありません。これまでU F O信奉者によって取り上げられてきた数々の存在証拠と言われるものの実態が、現代科学によってかなり解明され否定されています。しかし、それにもかかわらずU F Oを信じる人々はますます増加し、ニューエイジなどを背景に“U F O神話”は世界中に広まっています。

U F O信奉者は、科学的研究がその証拠性を否定しても、何が何でもU F Oが宇宙人の乗り物であり、宇宙人が地上にいることを事実にしたがっています。例えば、公式見解として宇宙人の遺体の存在は事実でないことが発表されても、「政府は真実を隠蔽している」「アメリカ政府はすでに宇宙人とコンタクトしているのに、これに関する情報を隠している」「スペースシャトルの宇宙飛行士はU F Oに出会っているのに口止めされている」などといった事実無根のデマをつくり上げ、U F O神話の正当性をどこまでも主張しようとしています。

1991年、イギリス南部でのミステリーサークル事件（*麦畑に幾何学パターンが突如出現したという事件）は、U F O信奉者に大きな興奮を与えました。麦の倒れ方といい、一晩の内に突如でき上がったことといい、とても人間の仕業とは思われず、U F Oの着陸跡か宇宙人からのメッセージに違いないと騒がれました。しかしこの騒動は、後に二人の老人が、「自分達がいたずらでつくった」と告白するに及んで一段落することになりました。こうした結末があっても依然として、U F Oは地球に飛来し、多くの宇宙人が地上で生活していると言いつづけているのです。

現在では、U F O“宇宙人乗り物説”に対して、きわめて客観性に富んだ反論がなされています。これらの批判書とU F O信奉者の見解を比較してみるだけで、どちらの言い分が正当であるのかは明白です。U F Oについての真偽の判断は、両者の意見を比較することによって簡単になされます。しかしU F O信奉者は、客観的な反論や証拠が示されても、それでもまだ本物はあるはずだとの姿勢を崩そうとしません。その姿勢は、事実よりも空想的信条を根拠とする、まさに新興宗教そのものと言えます。

一部の信奉者の間でU F Oが信じられている限りにおいては、それほど大きな問題はありません。どれほど科学者や政府サイドから正式な見解が出されても、事実を隠しているに違いないと頭から決めてかかる人達に、何を言っても無駄でしょう。U F Oが宇宙人の乗り物であると言うために、次々と都合のよい記事を捏造するような人達に、返す言葉はありません。狂信的な新興宗教に対しては、どうぞ、ご自由におやりくださいとしか言えないのと同様に、空想に取り憑かれて現実との区別さえつかなくなっているU F O信奉者は、そのまま置いておくしかありません。U F Oは宇宙人の乗り物であり、宇宙人はすでに地球上にいるという考えから脱け出ることのできない人々——そうした思想的な牢獄の中に住み続ける人々が事実目覚めるのは、霊界に行かない限り難しいかも知れません。状況は狂信的な宗教者と全く同じなのです。



スピリチュアリズムとUFO信仰の違い

地球以外の天体にも確かに宇宙人は存在します。また未確認飛行物体としてのUFOも存在します。しかしUFOが、宇宙人が地球にやって来るための乗り物であるという事実は存在しません。地球上では毎日何百人という人々によってUFOが目撃されていますが、それは異星人の乗り物ではありません。UFO信奉者が一方的に宇宙人の乗り物と思い込んでいるに過ぎません。そうした人達にとっての最大の敵は科学者と言えます。空想を土台としたUFO信奉者の信念にとっての最大の脅威は、科学的な反証です。

科学者が敵となりやすいという点においては、スピリチュアリズムとUFOは共通しています。そのため多くの人々から、スピリチュアリズムはUFOと同様のジャンルに属するものとして見られてきました。しかし、スピリチュアリズムとUFOは全く別物です。死後の世界や霊の存在とUFOの存在は、本来全く次元の異なるものです。死後の生命や霊界はどこまでも事実の世界であり、UFOは虚構の世界なのです。

UFO神話の弊害

スピリチュアリズムにとってUFO神話を見ることができないのは、それが「霊界通信」の中に入り込んで、霊界通信を低め混乱させているという事実があるからです。霊界通信の背景には人類の救済を目的とした霊界あげての大計画があります。地球人類は霊界からの働きかけによって新たな進化の段階へと進もうとしています。その中心的役割を果たすのが高級霊からの「霊界通信」です。そうした本来もっとも崇高であるはずの霊界通信の中に、ただの空想に過ぎないUFO神話が混入してしまっているのです。

こうした困った傾向は、米国のニューエイジの中で発生しました。スペース・ブラザーと称する宇宙人達からのチャネリングが米国内で流行しました。プレアデス星をはじめ他の天体の住人を名乗るソースからの通信が評判となりました。こうして純粋な霊界からの通信であるはずのチャネリングに不純要

素が混入することになり、チャネリング（霊界通信）自体が極めて程度の悪いものに堕ちてしまいました。そして霊界通信を信じる多くの人々に混乱を与えることになったのです。

言うまでもなく、スピリチュアリズムとUFO神話は全く異なるもの、相いれないものです。そのことをスピリチュアリズムに係わる人々はよく自覚し、UFO神話に惑わされないようにすべきなのですが、残念なことに、現実には多くのスピリチュアリズム関係者がこれに巻き込まれています。UFO信仰が「チャネリング」というスピリチュアリズムと共通の通信手段を利用し成り立っているために、宇宙人からの通信が本物であるかのように思わされてしまうのです。「霊界通信」という厳粛な事実の中に、UFOや宇宙人にまつわる嘘が侵入することによって、正当な霊界通信（チャネリング）が本来の純粋さを失いかけています。こうしたUFO神話とチャネリングの混同は、本物のチャネリングにとっての大きな問題点と言わなければなりません。



スピリチュアリズムとUFO信仰は両立しない

繰り返しますが、スピリチュアリズムとUFO信仰は全く別物であり、両立しません。スピリチュアリズムは事実であり、UFOは単なるフィクションに過ぎないのです。すでにチャネリングの中に入り込んでいる宇宙人からの通信と称されるものを、排除することが必要なのです。UFO神話は現在の新新宗教の中にも取り入れられ、教義の一部となっています。スピリチュアリズムとUFO信仰の違いを明らかにすることは、スピリチュアリズムと新新宗教の立場の違いを明確にすることでもあります。

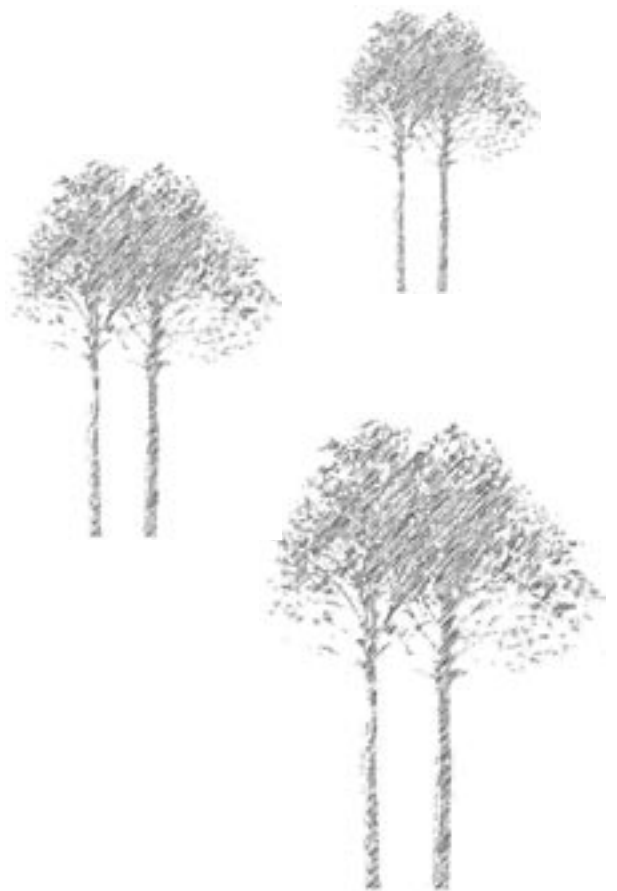
シルバーバーチなどの高級霊による通信では、部分的に宇宙人について言及することはあっても、UFOについては一切取り上げていません。もし宇宙人がすでに地球上にいるとか、UFOが宇宙人の乗り物であるというのが事実であるとするなら、シルバーバーチがそれについて一言も触れないはずはありません。こう言うと、地球人にはまだ真実を知る時期がきていないために明かされないのだとの反論をする人がいるかも知れません。しかしそれを言うなら、UFO“宇宙人乗り物説”に対して挙げられている全ての批判に対しての再反論をこそ、先にすべきです。正当な批判を無視して、地球人にはまだ知る時期がきていないなどと居直ることは、虚構を勝手に事実と決めつける独断論と言わざるを得ません。また心霊現象におけるテレポーテーションと同じ原理で、UFOは他の天体から瞬時に地球に飛来（移動）することが可能であるとの見解を示す人もいますが、こうした言い分自体が、すでにUFOは宇宙人の乗り物であるという独断を前提にしていることなのです。これまで科学者サイドから出されたUFOへの反論をすべて明快に克服してからでない限り、UFOは宇宙人の乗り物であるとは言えないはずで

他の可能性 — 物質化現象と幽体離脱中の体験

先に述べた催眠術下におけるフィクション・ストーリー以外に、UFO（未確認飛行物体）について考えられる可能性として、次のようなケースがあります。一つは、幽界から物質化して現れた乗り物が

UFOとして肉眼で見られるというものです。その際、UFOの乗組員は、当然のことながら幽界の低級霊ということになります。しかしこうしたことは、わずかな可能性として挙げられるに過ぎません。

もう一つは宇宙人とのコンタクト・ストーリーについてです。それは、コンタクト・ストーリーは幽体離脱中の体験であるというものです。アブダクティイーが催眠術によってつくられたフィクションであることはすでに述べましたが、幽体離脱中に会った幽界の低級霊を、宇宙人だと錯覚したということも考えられます。しかしこれについても、わずかな可能性があるという程度に過ぎません。



アトランティス・ムー伝説

エジプト・メソポタミア・中国などの古代文明よりもさらに古い文明が、現在の太平洋と大西洋上に存在しており、それが大地震や大洪水によって短期間に海中に没したとの伝承があります。アトランティス大陸文明とムー（レムリア）大陸文明論などです。アトランティス大陸については、ギリシアの哲学者プラトンが対話編『ティマイオス』と『クリティアス』の中で述べたことで、ムー大陸については、19世紀にイギリス軍人ジェームス・チャーチワードが『失われた大陸』の中で取り上げたことにより、多くの人々の注目と関心を集めてきました。これら二つの古代大陸は、いずれも一万年以上に高度の文明が開き、都市には大神殿が立ち並び、まさに理想郷（ユートピア）と呼ぶにふさわしいものとして描かれています。

多くの学者や探検家などが、これら古代大陸文明の存在証拠を探すために奔走してきました。しかし現在に至るまで、決定的な考古学的証拠となるものは発見されていません。

アトランティス大陸の仮説

これまでこの二つの古代大陸文明の存在場所について、さまざまな仮説が現れました。アトランティス大陸については長い間、プラトンの言うように大西洋にあるのではないかと考えられてきましたが、近年になってミノア文明の発掘が進むにつれ、エーゲ海のミノア文明がアトランティスのモデルとなったのではないかと、との説が有力になってきています。現在では大西洋の海底の様子は科学的調査によって明らかにされており、かつて大西洋にアトランティスが存在していた形跡は認められず、アトランティス“大西洋説”は根拠を失っています。

アトランティス“ミノア説”が有力視される中、近年になって、エドガー・ケイシーによる「1968～69年にアトランティスの神殿の一部がフロリダ沖の海底から発見される」という予言を信じた米国人（J・バレンタイン）が、現実にフロリダ沖パハマ諸島のビミニ島付近から謎の巨石遺跡を発見する

という驚くような出来事が起こりました。この発見はアトランティス信者を興奮させることになりました。その後1977年、1986年に同地域で別の遺跡が発見され、現在も調査が進められています。ケイシーの予言を信じる人々にとっては、まさにここがアトランティスではないか、ということになりましたが、調査の結果、それは自然が造った地形であることが確定され、アトランティスの可能性は否定されました。

ムー大陸の仮説

一方のムー大陸ですが、ジェームス・チャーチワードがインド滞在中にベンガル地方で出会ったヒンドゥー教の司祭に、古代から伝わる碑文に案内され、それを解読することによってムー大陸の存在が明らかにされたということになっています。しかし彼のこの一連の著述は、インチキであることが確かめられています。なぜなら謎の碑文を発見した場所が初めはインドのある寺院とされていたのが、後の書ではさらに奥地のチベットになるなど、重要な点での食い違いがあるからです。彼がどれだけムー大陸の存在を実証的に扱っているかのようなポーズをとっても、ムー大陸の存在はフィクション性が濃厚だと言わざるを得ません。

それでも依然としてムー大陸文明の存在を信じる人々はいて、さまざまな仮説を出しています。それらの人達は、チャーチワードの著述を文字通りとらえるのではなく、もっと大きな含みを持って考えようとします。そうした中で一応の説得性のある見解は、かつて南太平洋上に存在していた島々（*海洋技術を媒介としてできていた）を一つの文化圏と見なし、それをムー大陸であるとするものです。そしてその島々は、氷河の後退による海面上昇によって海中に没したと言うのです。イースター島に現在残る巨石像はその遺跡であるとも言います。



今後の考古学の研究に待つ

いずれにしてもアトランティスもムーも、その存在の有無については、これからの考古学の研究によって明らかにされることでしょうか。一万年以上昔に文明が栄えていたという点については、一概にフィクションと決め付けることはできません。なぜなら現在では、当時の考古学遺物（*中国・日本で発見された土器は約1万5千年前のもの）によって、すでにその時代にそれなりの文明があったことが確認されているからです。ただしその文明の程度が、伝承の中で言われてきたようなハイレベルのものであるかどうかは、大いに疑問のあるところだと思います。プラトンの描いたような高度に発達したアトランティスの存在となると、当然否定されることになります。

何にしても私達は、今後の考古学の成果に注目していけばよいということです。考古学や他の科学技術を用いた調査によって、その実態はいずれ明らかにされることでしょうか。

アトランティス人からのチャネリング？

自分の過去世はアトランティス人？

ニューエイジにおいては、アトランティス・ムー古代大陸文明は宇宙人やUFOと同じように、大きな部分を占めています。また日本の新新宗教などでも、それが頻繁に取り上げられています。

ニューエイジでは、かつてアトランティスの住人であったという“霊”からの通信が送られてきており、そこでは当時の様子が詳細に語られています。宇宙人と同様、アトランティス・ムーは、チャネリング（霊界通信）の中に大きく入り込んでいるのです。そうした霊（通信ソース）の代表に、シャーリー・マクレーンが彼女の著書の中で絶賛して有名になった『ラムザ』がいます。ラムザはその後、あまりの品性のなさに霊性（霊的レベル）に疑問が持たれるようになりましたが、このラムザは、三万年前のアトランティスの戦士であったと述べています。ラムザについては、言うまでもなく“低級霊”ですが、つい最近に至るまで、優れたチャネリング・ソース（通信霊）として賛美されていたのです。まさに『ラムザ』は、低級霊がよいように地上人を翻弄す

るという典型的なケースと言えます。

何十年・数百年前の地上人といった月並みな通信霊では物足りないということでしょうか？ 数万年前の幻の文明であったり、地球以外の存在でなければ魅力を感じられないといった風潮が蔓延しているようです。残念なことに、スピリチュアリズムを受け入れた人々の中においても、アトランティス人からのチャネリングを本物と錯覚している人達が見られます。

一万年以上も昔地上にいたという霊が、どうしてあれほど程度の悪いレベルに止まっているのでしょうか。わざわざ「自分はアトランティスにいた、アトランティス人としての過去世がある」というような、興味本位のことを口走るのでしょうか。軽々しく自分の身元を明かすような高級霊は一人としていません。ましてやアトランティスやムーといった地上人の好奇心をかき立てるような過去世に言及する者は、誰もいません。もし仮に、かつて本当にアトランティスやムーに住んでいたことがあったとしても、高次のレベルにまで至っている霊ならば、決してそうしたことは口にしないものです。地上人の「魂の成長」に関係しないことは、何とか隠しておこうとするものなのです。なぜなら地上人を好奇心に走らせることは、決して霊的成長にプラスにならないどころか、マイナスにしかならないからです。従ってアトランティスを引き合いに出すような通信霊は、初めから“低級霊”と判断しても間違いありません。

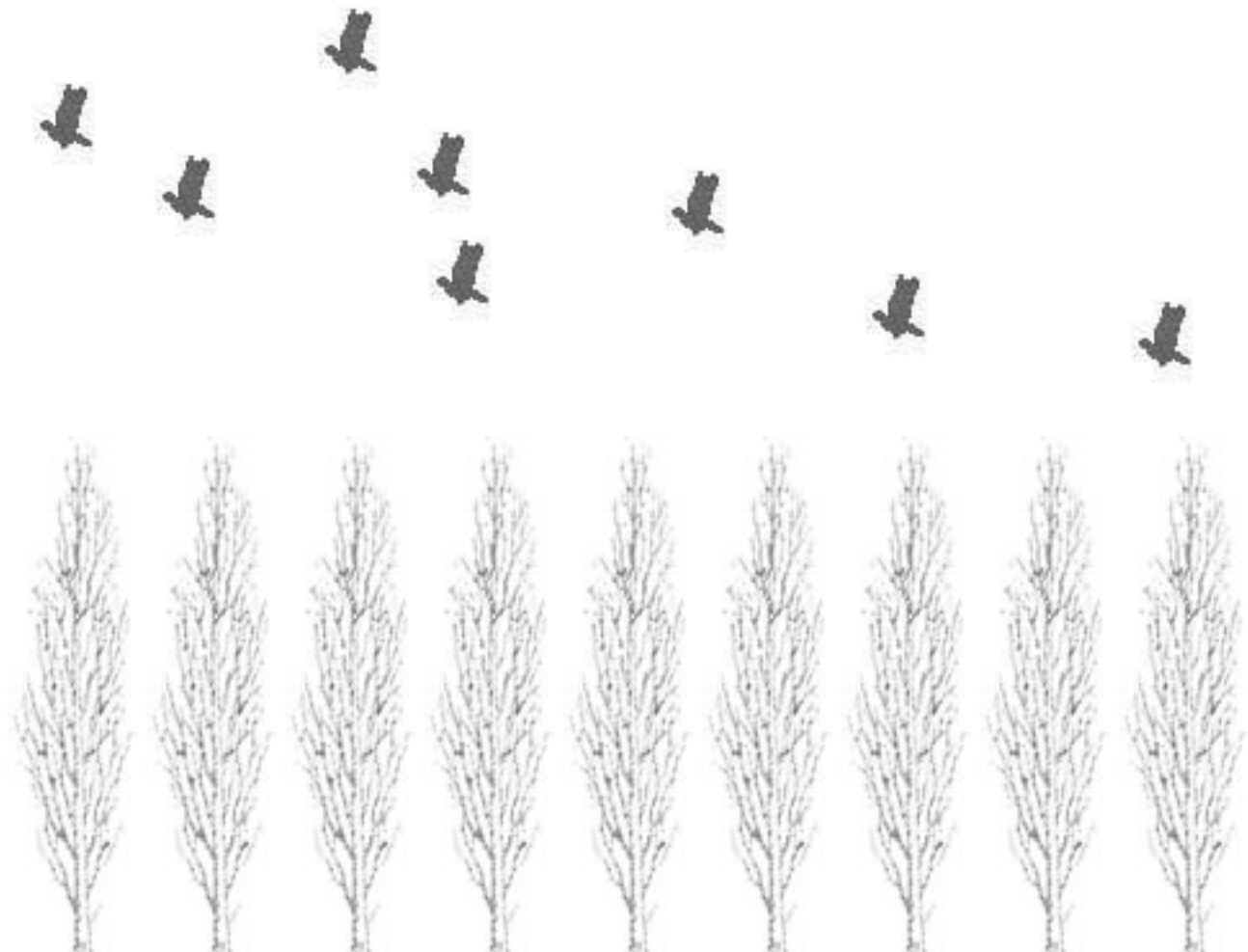
さらにその霊が語る内容を、スピリチュアリズムの高級霊の通信内容と比較してみることで、次のような点を確認すれば、内容のお粗末さはよりはっきりするでしょう。まず、「霊的真理」と違ったことを言っていないか、チェックすることです。特に再生についての知識は、霊の知的レベルを測る目安になります。“類魂”について正しく理解しているかどうかです。またその霊が、霊界あげてのスピリチュアリズムの大計画について認識し、その一員として認められているかどうかということも重要なことです。そして語る内容が、常に地上人の魂の成長を促すものとなっているか、上層の霊界のコントロールの下に置かれているか、地上人の好奇心を煽り立

てるようなことを言っていないか、どちらでもよいことを多く語っていないか、こうした点をチェックすることです。それによって、どの程度の霊であるのか、おのずと判別できるはずです。

アトランティスやムーに住んでいたと称する霊（通信霊）からの通信がある一方で、現在では、自分の前世がアトランティス・ムーであったという人達が大勢現れています。前世探しブームの中で、自分の前世がアトランティス人であったことが一種のステイタスになっているかのような感があります。退行催眠やリーディングで、「あなたにはアトランティスでの過去世があります」と言われれば、大半の人々は本当かしらと思いつつも、内心うれしく

感じるものです。夢とロマンがたちまち広がります。

しかし、それが事実でないことは、すでにニューズレター5号『退行催眠と前世療法』において述べた通りです。嘘でも夢がある方がいいという人には何も言えませんが、真実でないものを拠り所とする人生は、虚しいかぎりです。仮にアトランティスに住んでいたのが事実であったとしても、一万年以上も前にこの世を去っているのですから、その後すでに何回かの再生を体験して全く別人になっているはずで、現在のその人が、アトランティス時代と同じ人物像であるわけがありません。今の私達の内容は、これまでの過去世の総決算であるということを考えれば、過去世にこだわることは実に愚かしいことなのです。



スピリチュアリズムに係わる問題とは

分かってみれば、アトランティスやムーの話題はすべて想像上のみ有り得ることで、事実ではありません。しかしフィクションであっても、それを真に受け信じている人々が実際多くいるのです。アトランティス・ムー信仰によって最も困った問題は、安易な前世探しのブームを作り出し、本来厳粛であるはずの再生の問題を興味本位の対象にすり替えてしまうことです。空想としか言いようのない再生観を、人々の中に浸透させてしまうことです。

もう一つの問題点は、霊界通信をいい加減な遊び半分の道具としてしまうということです。霊界通信は本当は高級霊からの教訓を受けるための神聖な手段なのですが、まともな人々をそれから遠ざけることになってしまうのです。さらには低級霊からかいかいの場所を提供し、霊界通信自体のイメージを地におとし貶めることになります。好奇心に駆られた人々は、霊界人からのチャネリングでは満足できないとみえて、それを宇宙人に求めたり、遙か大昔のユートピアのアトランティス人に求めるという幼稚なことをしているのです。

アトランティスやムーがらみで語られる前世譚や再生譚、またチャネリングのすべてが、「霊的事実」から全く掛け離れたものであり、単なる想像上の作り事か低級霊のからかい以外の何物でもないことを、よくよく心に留めておくべきです。そうした程度の悪い好奇心によって作られたフィクション・ストーリーが大手を振るうような状況を、いつまでも見過ごしてはならないのです。

*「エドガー・ケイシー」のリーディングについて

文明破壊の危機から現代人を救うためにアトランティス時代の人間が現代に再生するとか、現代の米国人の多くはアトランティス人の生まれ変わりであるというような、退行催眠やいい加減なチャネリングまがいのことを述べているのが「エドガー・ケイシー」です。エドガー・ケイシーは20世紀最大の予言者などと呼ばれているため、一部の人々には、アトランティスに関する彼のリーディングも信憑性の高いものであるかのように受け取られています。ケイシーのリーディングを信用して、

アトランティス人が本当に今再生しているかのように考えている人々もいます。

言うまでもなく、それらが事実であるはずはありません。ケイシーのリーディングには、かなりの部分に低級霊の侵入の様子が窺われ、真と偽の情報、高次と低次の情報が入り交じっています。ケイシーのリーディングには、こうした本質的な問題が多く含まれています。予言リーディングや輪廻リーディング同様、アトランティスに関するリーディングにも信憑性はありません。

エドガー・ケイシーについては、こうした多くの問題点がある一方で、熱狂的な信奉者が現在もなお大勢いることを考えて、次回のニューズレターで取り上げる予定です。



❖スピリチュアリズム・ライブラリー❖

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
—スピリチュアリズムが明かす—「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」

◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
—高級霊訓が明かす—「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」

◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」 (297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」 (357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
—エクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活—
『Life After Death』 ネヴィレ・ランドル著／小池 英 訳

◆マイヤースの通信—永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆マイヤースの通信—個人的存在の彼方 (全訳) (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』 (260頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

〈今後の出版予定〉

◆シルバーバーチは語る
『Teachings of Silver Birch』 (全訳) A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『A Voice in the Wilderness』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆ジャック・ウェバーの霊現象 『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著／近藤千雄 訳

◆妖精物語 『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著／近藤千雄 訳

“スピリチュアリズム・ニュースレター”について

このニュースレターは、これまでスピリチュアリズムを通じてご縁のあった方達に、一年間無料でお届けいたしております。皆さんのお知り合いで、お読みにになりたい方がいらっしゃいましたら、お知らせください。直接お送りいたします。バックナンバーをご希望の方もお知らせください。

これをお読みになって、どのような感想を持たれたでしょうか。どうぞ気軽にご意見をお寄せください。このニュースレターは、今後、3カ月に一度発刊する予定です。

なお、ニュースレターの発送については手違いのないように注意いたしておりますが、時期を過ぎてもお手元に届かない場合には、遠慮なくお知らせください。（現在のところ、1、4、7、10月の初旬に発行いたしております。）

今後の出版予定について

大勢の皆さまからご希望をお寄せいただいております、『シルバーバーチは語る』（Teaching of Silver Birch）を、やっと発行できる運びとなりました。製作に時間がかかり、お待たせいたしました。8月下旬には出版いたします。

ご予約いただいております方へは、出来上がり次第お知らせいたします。新たなご注文は、8月中旬以降にお願いいたします。

また現在絶版となっております、『シルバーバーチの霊訓（仮題）』トニー・オーツセン編の3冊のうち2冊を、今年中に復刻出版できる見通しとなりました。おそらく秋と冬頃になると思いますので、その時期にお問い合わせください。